

機関番号：12603

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520390

研究課題名 (和文) ドイツ語非定形項の語彙意味論的研究

研究課題名 (英文) Lexical semantic study on infinite complements in German

研究代表者

藤縄 康弘 (FUJINAWA YASUHIRO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60253291

研究成果の概要 (和文)：

非定形項とは、主格によって示される文法的な主語を持たない、従って、いかなる時制や法によっても特徴づけられていない動詞表現のことである。こうした動詞表現は、とりわけ願望や要求の動詞のもとに現れる (例：he wished/ordered me *to come*)。言語学では、これらがどの程度 *that* 節のような文的表現であるのか、また、非定形の動詞の論理的な主語が上位にある動詞のいずれの項と同一指示であるのかについて議論が盛んであるが、前者は統語論、後者は語用論に属する問題とされており、事情はドイツ語でも同様である。もっとも、ドイツ語には結束と非結束の不定詞が存在したり、コントロールのシフトがより広範に見られたりするなど、より複雑で興味深い現象が認められる。そこで、本研究ではドイツ語に焦点を当て、上述の統語論的な問題と語用論的な問題とを語彙意味論の理論に基づいて包括的に扱うことを試みた。語彙意味論とは、表面的に1語である *wish* や *order* といった動詞を下位述語に分解する理論である。ちょうど使役と反使役の交替にとって重要である、よく知られた2つの関数 **DO** と **CAUSE** とに準ずるかたちで、願望の状況を表す **VOL** と義務づけの状況を表す **OBL** とを有効な関数として提案し、これらの関数によって非定形動詞とその論理的な主語のさまざまな実現形式のパターン (広義の態) を捉え直した。

研究成果の概要 (英文)：

With infinite complements, I mean verbal expressions without grammatical subject in nominative case and therefore without any tense and mood marker. Such verbal expressions appear, above all, with verbs of wishing and ordering (*e.g. he wished/ordered me to come*). In linguistic discussion, it is controversial if and to what extent they are sentential like *that*-clauses (*e.g. he wished/ordered that I would/should come*) and how to predict which arguments of the governing verb the logical subjects of infinite verbs are identical with – the two questions being supposed to be divided into syntax and pragmatics. The same is true for German, which, however, has more complex and interesting phenomena such as coherent and incoherent infinitives as well as widely attested shifting controls. In the present study, I focused on German and attempted to integrate both the syntactic and pragmatic issues on the basis of Lexical Semantics theory. According to this theory, single verbs in surface like *wish* and *order* are decomposed into several sublexical semantic functions. Parallel to the two well-established functions, **DO** and **CAUSE**, which are fundamental for the causative-anticausative alternation, I proposed **VOL** as situation of wishing and **OBL** as that of obligating to account for various realization patterns (diathesis) of infinite verbs and their logical subjects.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：言語学，ドイツ語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：独語，不定詞，言語学，統語論，語彙意味論

1. 研究開始当初の背景

非定形項の統語論については、さまざまな言語を対象に研究が重ねられてきたが、

- (1) 非定形項の統語的範疇は節か否か
- (2) 非定形項のいわゆる「意味上の主語」はどのようにして特定されるか

という根本的な問題について議論が尽きていない。

前者については、定形補文と広範に共通する統語的振舞いが非定形項の節性を示唆する反面、非定形項には上位述語と一体となって複合述語を形成するという、まっとうな定形補文には見られない単文化の性向も言語横断的に認められる（例：仏語 *je l'ai fait venir*）。

また、後者については、非定形項とともに目的語を取る述語が主語コントロールを促したり（例：John *promised* Mary to leave → John would leave）、目的語コントロールを促したり（例：John *allowed* Mary to leave → Mary would leave）と一定しないことから、これは純粋に構造的な問題ではなく、意味論、語用論等の関わる複合的な問題であるとされる。しかし、具体的にどのような意味論または語用論が関与的なのかは、なお未解明のままである。

ドイツ語はこれら2つの問題について非常に有益なデータを提供する。(1)については、Bech (1955/57) が逸早く「結束」(Kohärenz; coherence) と「非結束」(Inkohärenz; incoherence) の別を指摘したが、この区別はいまなお、前者が非定形項の非節的な兆候、後者が節的な兆候として、この分野の研究の経験的基盤をなしている。その際、結束と非結束の関係は、歴史的な発展（文法化）に鑑みると、前者（非節）から後者（節）が派生したと捉えることが理に叶っている一方、共時論的な統語論ではたいてい後者（節）から

前者（非節）が派生するという逆の見方が採られており、通時論との溝は大きいと言わざるを得ない。また (2) についても、Bech (1955/57) がオリエンテーション (Orientierung; orientation) という語彙論的なメカニズムを提唱したにもかかわらず、このメカニズム自体は十分に検討されないまま、現在では上述の統語論的前提の下、「不可視の照応詞 PRO がもつばら語用論的な理由でその先行詞を決める」という趣旨のコントロール理論が一般的に認知されるに至っていた。

ところで研究代表者は、それまでに行った統語的使役構文等の調査を通じ、結束の非定形項が類型論で言うところの能格的（「非対格的」ではない！）なフォーマットに依拠していると見ていた。この見方に立つと、結束と非結束の史的関係は能格型から対格型への移行という一般的な言語変異の図式に還元できる一方、共時論における非結束の優先も対格型の無標性によって説明がつくと考えた。また、(2) のコントロールの問題についても、一般に考えられているほど語用論的な現象ではなく、むしろ広義の態の問題として、より構造論にひきつけて捉えることが可能ではないかと考え、そのアイデアも提示していた (Fujinawa 2005)。しかし、従来、(1) は統語論、(2) は意味論または語用論の問題として別個に論じられてきていたために、両者を統合的に理論化するまでには至っていなかった。

2. 研究の目的

そこで研究代表者は、統語論と意味論の接点を効果的に扱うことができ、使役をはじめとする態の研究でも実績のある語彙意味論の枠組みを援用して、上述の非定形項の統語論的・意味論的問題の解決に向けた新たな形式化の枠組みを提示することを企図した。具体的には以下の3点の解明を目的としていた：

- (1) Wunderlich (1992) の線の語彙意味論の道具立てを用い、ドイツ語における定形動詞と非定形動詞（とりわけ結束のもの）の項構造上の相違を明らかにする。
- (2) 非定形項や補文を取る述語は意味構造上、一般動詞が DO や CAUSE などの下位述語に分解されるように、VOL (意志) や OBL (義務) などの下位述語に分解されることを示す。
- (3) 上述 (2) の述語は、さまざまな態で表れることを、使役、脱使役、反使役など、通常の態と共通する道具立てを用いて示す。

3. 研究の方法

研究初年度の 2008 年度は、ちょうど一般動詞が DO や CAUSE などの下位述語に分解され、使役、反使役、脱使役など、さまざまな態で実現し得るように、意志や要求の動詞も VOL (意志) や OBL (義務) などの下位述語に分解され、同様の図式による態交替を示すということを立証すべく、データ収集を行い、具体的な分析に着手した。

収集したデータは、この問題の解決の鍵を握ると思われる wollen 「～したい、～して欲しい」や wünschen 「願う」のような意志・願望の述語を用いた実例であり、これを補文の質（定形か非定形か、補文化詞があるかないか、目的語を有するか否か、など）や述語の文法範疇（テンス、ムード、など）によって検索できるようデータベース化し、次年度以降の本格的分析に備えた。なお、成果の一部は学術論文にまとめ、翌年度に公刊した (Fujinawa 2009)。

さらに定形の補文についても、先行して分析を行った。その結果、wollen や wünschen などの補文における接続法と補文化詞の有無との関係は、単なる形式的相補性として記述されるべきものではなく、文のムードに依拠している、すなわち、意味論的に動機づけられていることを発見し、この成果を日本独文学会第 36 回語学ゼミナールにおいて発表した。

研究第2年度の2009年度は、前年度に収集した意志・願望の述語が用いられた実例をデータベース化し、詳細な分析を進めた。また、これと平行して、願望表現の対極に位置づけられる感嘆文にも取り組み、意味論が動詞配置の問題のどこまでを解決できるものなのか、考察を行なった。その成果は日本独文学会第37回語学ゼミナールにおける口頭発表で披露した。

さらに、理論的な基盤となる語彙意味論に関連して、日本独文学会秋季研究発表会においてシンポジウムを開催し、自らも基調報告を行った。これにより、本研究課題が立証を目指すテーゼ、すなわち、意志や要求の動詞

が、ちょうど一般動詞が DO や CAUSE などの下位述語に分解されるように、VOL (意志) や OBL (義務) などの下位述語に分解され、この分解に基づいて、その態的な振舞いが記述・説明できるというテーゼを、その前提部分において強化することができた。

研究最終年度の 2010 年度は、前年度までに得られたデータのありようを説明するための構造式を策定する課題に取り組んだ。その結果、当該の述語は、ちょうど使役関連の述語での行為のように、意志の関係が基本にあること、また使役、脱使役、反使役など、通常の態と共通する原理的道具立てを用いることで、さまざまな述語が関数表記され、それをもとに適格に統語的なコントロール関係や格表示が再現できることを確認した。

4. 研究成果

以上のような研究を通じ、目的として挙げた3点に関して次のような成果が得られた：

- (1) ある動詞の定形が $\lambda y \lambda x \lambda e$ [DO (x, y)(e)] という構造なら、対応する結束の非定形動詞は当該項の順序が逆転した（つまり、定形であれば最後に満たされるべき項 x を最初に満たされる形に転換した） $\lambda x \lambda y \lambda e$ [DO (x, y)(e)] である。
- (2) 位置変化動詞の意味構造が DO (x, y)(e') & CAUSE (e', BEC (LOC (y, z)))(e) であるように、要求動詞 (auffordern 「命じる」、bitten 「頼む」、verlangen 「求める」など) のそれも複合構造である。すなわち、「個体 x が、 e' という事態によって命題 p を望む状況 s 」を意味する VOL (x, p)(s) と、「状況 s により、個体 y が事態 e' を実現するための機能 F を負う事態 e 」を意味する OBL (s, F (y)(e'))(e) という2つの下位述語が、共通の状況項 s を介して VOL (x, p)(s) & OBL (s, F (y)(e'))(e) の形で結ばれる。
- (3) 例えば、wollen 「～してほしい」と sollen 「～すべき」のような交代は、使役と脱使役の関係と並行的に捉えられる。使役の構造 $\lambda y \lambda x \lambda e$ [DO (x, y)(e') & CAUSE (e', BEC (BE-PROPERTY (y)))(e)] をもとに、先行する状況項 e' の存在量化を通じ、脱使役の構造 $\lambda y \lambda e \exists e'$ [DO (x, y)(e') & CAUSE (e', BEC (BE-PROPERTY (y)))(e)] が得られるように、sollen の構造も、wollen の構造 $\lambda p \lambda y \lambda x \lambda e$ [VOL (x, p)(s) & OBL (s, F (y)(e'))(e)] をもとに、先行する状況項 s の存在量化により $\lambda F \lambda y \lambda e \exists s$ [VOL (x, p)(s) & OBL (s, F (y)(e'))(e)] として得られる。

これらの成果を応用し、ひとつには Fujinawa & Imaizumi (2010) を公刊した。これは

個体とイベントの関係を関数的に捉える試みであり、本研究課題の発展型として日本語との対照研究の可能性を見据えることができた。

さらに、国内外の研究発表会でも研究発表を行った。そのうち「言語体系の歴史と類型論」学会（ポーランド、ジェローナ・グラ大学）で行った発表（招待講演）は、本研究課題の成果によって得られる形態・統語論的な条件が、共時言語学と通時言語学の接点においても、高い応用可能性を有していることを明らかにした。これは、理論的には語彙意味論に基づく本研究が、より多くの研究者と連携し得る潜在的なインパクトを有していることを示したものと言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① Yasuhiro Fujinawa & Shinako Imaizumi (2010): “Zwischen Possession und Involviertheit: Zur semantischen Basis der Valenzerweiterung im deutsch-japanischen Kontrast.” In: *Neue Beiträge zur Germanistik* 9, pp.73-90. 査読有.
- ② 藤縄康弘 (2010): 「意味構造と項構造—基本関数の認定とその複合をめぐって—」日本独文学会研究叢書073, pp.4-24. 査読無.
- ③ Yasuhiro Fujinawa (2009): “(In-)Finitheit, unterspezifizierte Kasus und Argumentstruktur: Über Partizipien II im Perfekt und Passiv im Deutschen.” In: *Perspektiven Drei: Akten der 3. Tagung Deutsche Sprachwissenschaft in Italien Rom*, 14.-16. Februar 2008, ed. by C. Di Meola et al., Frankfurt a.M. et al.: Peter Lang, pp.113-126. 査読有.

〔学会発表〕（計5件）

- ① Yasuhiro Fujinawa: “Wo sich die Synchronie und die Diachronie überschneiden: Eine (Rand-)Bemerkung zur Verbstellung im Gegenwartsdeutsch.” International Conference “History and Typology of Language Systems” 招待講演, 2010.10.08. University of Zielona Góra (ジェローナ・グラ大学), ポーランド.
- ② 今泉志奈子・藤縄康弘: 「所有と関与のあいだ: ヴァレンス拡大の意味論的基盤についての日独対照」Morphology and Lexicon Forum (MLF) 2010, 2010.07.11. 国立国語研究所.
- ③ 藤縄康弘: 「意味構造と項構造—基本関数の認定とその複合をめぐって—」日本

独文学会 2009 年秋季発表会におけるシンポジウム「文意味構造」の新展開—ドイツ語学への、そしてその先への今日の展望」, パネリスト発表, 2009.10.18. 名古屋市立大.

- ④ Yasuhiro Fujinawa: *Was wusste der Wackernagel schon alles! Zur Verbstellung in den sog. Exklamativsätzen im Deutschen.* 日本独文学会第 37 回語学ゼミナール, 2009.08.26. ホテルオークス京都四条.
- ⑤ Yasuhiro Fujinawa: *Satzmodus jenseits von Haupt- und Nebensätzen: Über V2-Komplementsätze bei Wünschensverben im Deutschen.* 日本独文学会第 36 回語学ゼミナール, 2008.09.07. IPC 生産性国際交流センター.

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤縄 康弘 (FUJINAWA YASUHIRO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60253291